



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	都市祭礼と宗教的なモノの消費 : 東京都・鷲神社と花園神社の酉の市の事例 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	Tillonen, Mia Emilia
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第16322号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95253
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	TILLONEN_Mia_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：Tillonen Mia Emilia

審査委員	主査	教授	西川克之
	副査	教授	岡本亮輔
	副査	准教授	上田裕文
	副査	筑波大学 特命教授	山中弘

学位論文題名

都市祭礼と宗教的なモノの消費

——東京都・鷲神社と花園神社の酉の市の事例——

本論文は、近年、特に活発に論じられるようになった「宗教とツーリズム研究」の問題系において、物質から人間への働きかけという観点から酉の市の事例について考察したものである。

第1章では先行研究のサーベイが行われ、宗教的変容を論じるスピリチュアル・マーケット論をはじめとするマーケット論的アプローチについて検討され、アフオーダーダンス論・パフォーマンス論を導入して物質性の観点から考察する必要性が示される。第2章では本研究の事例である酉の市の形成史を踏まえ、都市祭礼研究の文脈に本研究が位置付けられると共に、酉の市の性格が神社によって異なることが指摘される。浅草の酉の市の場合、伝統的なイメージが強く、神社だけでなく福神講という熊手屋の祭祀集団によっても支えられる。一方、花園神社の場合、新宿という現代の繁華街に立地するため、露店を中心とする祝祭性が強いことが対比的に論じられる。

第3章では、酉の市において中心となる熊手の変遷が論じられる。元々、酉の市では様々な農具・農産物が販売されていたが、都市化の進展と共に販売商品の選別が進み、熊手が残った。その結果、熊手は「実用品」から「縁起物」へとその性質を変え、酉の市は縁起物の熊手を販売する場となる。そして、熊手屋と問屋という専門業者が台頭し、熊手や縁起物の独自の市場が形成されるに至る。

第4章では、熊手が原材料から製品へと変化し、最終的に神社で処分されるまでの過程が詳しく論じられる。そして、熊手の購入によって買い手と熊手との関係が

成立すると、買い手は熊手屋やテキヤとの関係、さらには酉の市との関係にも引き込まれること、つまり、熊手は、さまざまな人間・非人間のアクターから成るネットワークの結節点であることが指摘される。

第5章では、花園神社の酉の市を主な事例として、熊手を取り巻くパフォーマンスが論じられる。特に観光社会学の土産物論が参照され、酉の市が他の場所にも移植可能なフォーマットとして分析される。そして、そうであるにもかかわらず花園神社の酉の市が盛況を保つ理由として、独特の「祭りの雰囲気」の醸成が指摘される。そして、酉の市が有する開放性は、個人が宗教との軽く「ほどよい」関係性を築くことを可能にするとし、都市に溶け込む伝統宗教の現代的形態として酉の市が捉え返される。

本論文の学術的貢献としては、①先行研究の少ない酉の市について綿密かつ長期にわたる現地調査を行い、その機能と構造を明らかにした点、②宗教観光論において物質性の観点からの議論を本格的に導入した点、③世俗化論・私事化論をはじめとする現代宗教論の問題意識の下に現代都市祭礼として酉の市を捉え返した点、④鷲神社と花園神社の2つの事例を対照させることでそれぞれの特徴を描き出すとともに、ポスト世俗化社会において両者の酉の市が持続するメカニズムを示した点などが挙げられる。

他方、こうした先駆性の高さがもたらす疑問点もいくつかあり、質疑応答では以下のような点が議論された。物質性を強調するあまり、「重い宗教」「軽い宗教」という本論文の根幹に関わる概念が十分に定義づけられておらず、伝統や諸アクターが織りなすネットワークのダイナミクスの記述が深いレベルに達していない。授与品と縁起物の関係性が理論的に区別されておらず、研究事例の位置づけについての説明が不足している。本論文が言う「宗教」の定義に曖昧さがあり、研究事例が宗教(文化)だという認識を持っているのが当事者なのか観察者なのか分からず、理論的テーマである宗教の社会的変容の主体が明確に示されているとは言い難い。宗教文化の物質性は酉の市や日本に固有のものではなく、例えば西欧のキリスト教圏の聖地ではイエス・キリストや聖母マリアのグッズなどが商品として提示されているが、そうした事例も踏まえる俯瞰的視野の下で本研究事例はどのように位置づけられるのか。酉の市とそこでの熊手の消費が魔術の現代的な残存として捉えられるの否か。本研究を観光現象として対象化した場合、パフォーマンス論やアフォーダンス論の観点からいかに特徴づけられるのかなどである。

こうした課題は本論文の成果があって初めて浮上するものであり、それぞれの点について適切な回答があった。本論文は博士論文としての水準を十分に満たしており、上述のとおり学術的貢献、新規性、独自性が極めて高く、審査委員会では博士(観光学)学位の授与に値するものとして、本論文を合格と判断した。